

## Lafcadio Hearn の病蹟

(ラフカディオ・ハーン／病蹟／精神保健)

遠藤 みどり\*

### The Pathography of Lafcadio Hearn

(Lafcadio Hearn/pathography/mental health)

Midori ENDO\*

#### はじめに

Lafcadio Hearn は、アイルランドにいた幼時に幻覚を見たことがあると語ったり、また熊本時代以降の晩年に時として被害妄想的な言動があったことが知られている<sup>4,15)</sup>。しかし前者については入眠時幻覚や弱視の影響を考慮すべきであり、後者に関しては状況的根拠が皆無とは言えなかったようである。また、それらの精神症状はいずれも一時的であったようで、五高・東大の後任者夏目漱石の場合のような周期性も証明されていない。むしろ、発達早期に両親と離れて異文化間を彷徨し、貧窮と闘って若年期を過ごしたその生い立ちや、不自由な日本語によるコミュニケーションの困難さ、帰化に伴うトラブル、配偶者一族を含む大家族を養う上での社会経済的責任などの環境要因の関与が大きかったと見られ、症状からしても神経症圏の *micropsychosis* であったと考えられる。彼には生育歴や性格からすれば境界型人格障害の *high risk* があったと見なされるが、上記の不利な要因にも拘わらず立派に明治日本の家長として一生を終えており、その生涯を辿ることで精神保健上、何らかの一次予防的な示唆が得られるかも知れない。本稿では、彼の *life history* の上でこうした結果をもたらしたプラス・マイナスの諸因子を検討し、社会変動が著しく国際化を迫られている現在の我が国における少数者の生き方の参考としたい。

#### Lafcadio Hearn の生育歴と性格

Lafcadio Hearn は1850年、英国国教徒のアイルランド系軍医の父と、イタリア系やアラブ系の混じったギリシア人の母との間にギリシアの島で生まれ、2歳でアイルランドへ伴われたが、彼が4歳の頃、ダブリンでの生活に馴染めなかったギリシア正教徒の母が次

男の出産のためギリシアに帰っている間に、父は離婚手続きをして別の英国女性と再婚し、以後は裕福なカソリック教徒の父方大伯母のもとで育てられた。生母は情緒的にかなり不安定な人で、彼にオリエント風の服装をさせ、主としてイタリア語で話しかけていたという。Hearn はその後フランスのカソリック系寄宿学校に入れられたこともあり、英仏の厳しい神学的教育には終生反感を持っていた<sup>4,7-9,15)</sup>。彼は自分では「神経質な子供」だったと書いている<sup>15)</sup>が、イギリスのやはりカソリック系の学校で事故で一眼を失うまでの少年時代には、かなりの腕白であったらしい。

眼の障害と大伯母の破産による経済的零落のために拗ね者になってからは、雇用者とのトラブルも多く一個所に定住することが難しかったようであるが、自己の主張と権利はかなり頑強に守り通すだけの強さと才能があった。Poe や Loti の影響を受け、19歳での渡米以後は旺盛な好奇心を活かして、得意とする文筆とフランス語を武器にジャーナリズムの世界で身を立てたが、ヴィクトリア朝モラルに対しては反抗的であった。28歳の時には手紙の中で、自分が「われを忘れ、我慢が出来ず、極度に過敏で、ひっそりしておれず気ままで物に惑」ってしまうために「もう一步というところで」成果を手に出れなくなり「トラブルに陥らずに…一つの状況に健全な期間とどまることが出来ない」こと、阿片摂取の誘惑にも駆られたことを告白しており、シンシナティやニューオーリーonzやマルチニク島では、自分と似た境遇の混血の異性ととの交渉を持った。来日後40歳で、前夫と離婚したセツ（通称節子）夫人と結ばれ日本に帰化したが、普通の日本語での会話は不能で、一般の日本人とは英語の通訳を介し、夫人とは「へるんさんことば」と称せられた独特の片言で意思を通じていたという。日本では松江の島根県尋常中学校・師範学校、次いで熊本の国立第五高等中学の御雇外人教師を勤めたのち、神戸クロニクル紙の論説記者を経て、東京帝国大学文学部講師・早稲田大学

\*心理学 Department of Psychology

文学部教授を歴任し、1904年に自宅で心臓発作のため死去した<sup>2,4,7-11,15)</sup>。

長男によれば晩年には「感情家」で「なかなか頑固な点もあり」、「怒り心頭に発すると顔面蒼白となり」「I'll cut off your head!」と叫ぶ癖があった。またテネシー州在住時、子猫に残虐行為を働いた男に路上で拳銃を数発発射したことがあると言われる<sup>12)</sup>。

### 幼時の幻覚

大伯母の家で6歳頃から、克己心を養うという教育方針に則って、暗い部屋で独りで寝かされた Hearn は入眠時幻覚に悩まされるが、その経験を人に語ることは厳禁されていた。この種の入眠時幻覚はこの年齢のやや神経質な子供にはそう稀でないが、7歳頃に、時々逗留した変わった美人（彼の記述からは分裂症的な印象を受ける）に関連して起こった、キリスト教の神への恐怖を植えつけた異様な体験と幻視（黄昏の時刻で、強度近視という要素も考慮すべきである）が、口にできなかったためか PTSD のような形で、後年まで影響を残す結果となったようである。彼の遺稿によれば、このことは彼に悪魔信仰をもたらしたという（「私の守護神」、「偶像礼拝」<sup>2,4,15)</sup>。

### 五高・東大講師時代の迫害念慮

Hearn は熊本時代から友人への手紙に「自分はあらゆる耶蘇教徒の注意人物である」と書いていた<sup>15)</sup>。東大では少なくとも、頼りにしていた外山博士の逝去した明治33（1900）年から解雇された明治36（1903）年までの間は教官室に入らないことを通則とし、それ以前から大学での教官同士の交際を嫌っていた由で、夫人に「耶蘇教徒が同盟して自分を大学から追い出そうとしている」と語ったという。当時の東大の外人教授たちは悉くカソリック教徒であり、かつ大学出の学位所有者で、その上哲学のドイツ人ケーベル教授が彼に向かって「異教徒は皆焼き殺すべきだ」と放言した出来事があったとも言われる。解雇の原因は経済面の処遇や渡米の希望にまつわる大学当局とのコミュニケーション的トラブルであったらしいが、彼自身は、偶然無断で彼の講義を聴いた英国の女性教育者がスパイで自分を中傷したと邪推したようである<sup>15)</sup>。熊本時代にすでに多忙と官僚主義と外国人排斥ムードの勃興から日本への幻滅を味わっていた<sup>4)</sup>、初老期の身体障害者である彼にとって、上記の幼時記憶や少年時代のカソリック系寄宿学校で受けた心的外傷が再活性化する要素は十分あったと見られる。しかしその後勤務した早大では「松江時代に帰ったよう」であった由で、教授

陣に逆境を経て来た苦勞人が多く、Hearn が自分との共通点を見出しやすかったことなどの関与が大きかったと見なされている<sup>15)</sup>。

### Herbert Spencer への心酔は Lafcadio Hearn に何をもたらしたか？

Lafcadio Hearn が来日前の1886年以来、Herbert Spencer に心酔していたことは周知であるが<sup>4,7-9)</sup>、Spencer の理論は彼に何をもたらしたのか？ Hearn は Spencer の「倫理学原理」を読んで直ちに「厭世観を無意味にし、すべての種類の信仰に対して新しい畏敬を教える great doubt……無上の快感を覚え……全く新しい知的生活が開けた」と書いている<sup>4)</sup>。Spencer の理論は当時、アングロサクソン全体に自信をもたらしたと言うべきかも知れないが、その社会進化論に関しては Hearn は、妄想傾向のある独学者にありがちなユニークすぎる解釈をかなり加えている。しかしその影響が彼にとって結果的に、精神保健上プラスに働いたことは間違いない。少なくとも Hearn が東大で人気講師として勤務し得たのは、「Spencer に関してなら講義できる」という自負によるところが大きかったらしい<sup>1)</sup>。彼が感銘を受けたのはむしろその不可知論によってであろう。彼はいわば、Spencer の総合哲学体系をもとに彼なりの独自の体系的宇宙論を築き上げ、以後それを抛り所に生きることが可能になったのである。

しかし彼の個人史を見る時、東大での講義（1899-1900）記録の中に今一つ別種の暗示が含まれてはいまいか。すなわち、講義録<sup>16)</sup>のうち「マンク・ルイスと〈恐怖・ミステリー派〉」は、彼が「東の国から<sup>9)</sup>」でも重視を表明しているフランケンシュタインなどのゴシック・ロマン類を扱っているが、錬金術的な人工生命の創造の仮説を、スペンサー哲学が「ひっくり返してしまう」ので「今日では苦笑どまりであろう」と述べている部分がある。Hearn は Spencer の「有機的記憶」を拡大解釈し、Spencer の一元論は「まったく科学的事実にもとづいて」おり、「純粹宗教哲学において神秘と称している大半が、科学的な諸々の手続きと法則に置き換えられている」「東洋の深遠な哲理と驚くほどの類似性をもっている」と述べ、「感覚と思考の謎の多くは、感覚と思考とを経験中の個人の現在の生活とは何の関係もない。この謎は遺伝の光に照らしてのみ読まれるべきである。」「本能と直観は個人的なものではない。過去の幾生涯からの継承であるかもしれない」と Spencer の言葉を引用している<sup>16)</sup>。

このことと、前述の遺稿で幼時の恐怖体験の影響の

記憶をわざわざ「難儀して」微細にわたって思い出そうと努めていること、1887年以降に怪談の収集が多いことなどを考え合わせると、Spencer の理論は彼の PTSD の原因となった幼時の心的外傷体験に対し、荒唐無稽な恐怖として成人の視点から知的処理を施し、脱感作するのにも役立ったのではないかと推測される。そもそも彼の異教・暗黒信仰自体が、心的外傷のもとになったキリスト教への恐怖に対する防衛として生じたことを、彼自身が自覚している（「偶像礼拝」）<sup>2,15)</sup>

また Spencer や T.H.Huxley（「自分の不信仰の理由を述べられないすべての不信仰者が、公衆の面前で恥をかかされるのを見たいとハクスレーは言ったが、彼の言葉は健全な常識の言であった。〔東大講義録『新しい倫理』<sup>16)</sup>〕」の道徳観は、Hearn が来日後に明治日本の上流社会に互して行くのに大いに益したと同時に、若年時から反発しつづけた厳しい躰をも、ある程度見直させることになったであろう。かつて少年期にギリシア的な美しい魔女に誘惑されたいと告白した彼は、「新しい倫理」においては、宗教における禁欲の理想や中世ヨーロッパの宗教的弾圧さえも「人類進歩のために絶対に必要であった」という主張すら「認めねばならない」と述べるに至っている。

要するに、Spencer, Huxley らの理論は Hearn にとって、その生育歴・生活環境上での宗教的・民族的・言語的な複雑さにも拘わらず、人格の統合を可能にした拠り所の最たるものであったと考えられる。

### Henry Watkin と Elizabeth Bisland の役割

Hearn の精神的安定に関して看過することができないのは、Henry Watkin と Elizabeth Bisland が果たした役割である。Henry Watkin は、Hearn が19歳でシンシナティへやってきた時から日本での結婚後まで文通を続け、一種の父親代理の役割を務め続けたと見られる人物である。Hearn の初期の絵入り手紙には Poe 的なものへの嗜好が露わで、暖かい人柄の Watkin とのユーモアを交えた交友の中でそれを率直に表明昇華できたことが、この時期の経済的・社会的な困難にもかかわらず、かなりの精神的安定を Hearn にもたらしたと考えられる。そのほかにも Watkin は、Hearn に職を提供し、過度に放浪せずジャーナリスティックな仕事にとどまるよう忠告したり、女性問題の後始末を引き受けたりするなど、Hearn の対人接触の改善に大いに与ったと見られる<sup>3,11)</sup>。また Elizabeth Bisland（結婚後は Wetmore）は、Hearn が密かに憧れていたと見られるアメリカ南部出身の女性ジャーナリストで、ニューオーリーズ時代以降、

Hearn の空想傾向を健全な方角に導く役割を果たしたようである。後年は富豪夫人となり、Hearn およびその家族に対し精神的・経済的両面からの援助を惜しまなかった。日本での Hearn の被害妄想は、彼女との文通が途絶えていた間に顕著になり、文通再開後軽快している<sup>2,11)</sup>。

Hearn が手紙の中で、Watkin には dad, Bisland (Wetmore) には fairy god-sister (fairy god-mother のもじり) と呼びかけている<sup>2,3)</sup>のは象徴的であって、この二人の心理的 support がなければ、Hearn の病的傾向は遙かに顕著になっていたであろう。

### 日本、特に松江は、Lafcadio Hearn に何を与えたか？

Lafcadio Hearn は、アメリカから日本に来る前に渡ったマルチニク島に魅力を感じていた<sup>4,7-9)</sup>。この島の気候がもう少し著述に適していたなら、日本へ来る必要はなかったかも知れない。しかし彼は当時、かなり敏腕な異文化通のジャーナリストとして生活しており、この意味で決してヒッピー的ヴァガボンドではなく勤勉な小市民であった。開国したばかりの明治日本へ特派員として派遣されたのは偶然であったが、当時の日本は欧米のマイノリティーである彼にとって、極めて適切な生存のためのニッチを提供したと言えるであろう。

「初めて東洋の土を踏んだ日 (My First Day in the Orient)<sup>9)</sup>」に受けた「妖精の国」日本という印象を、西洋の影響の全く及んでいなかった最初の着任地松江で1年数ヶ月にわたって十分に醸成させることが可能であり、しかもその後の転居によって、少なくともこの土地に関連してはその印象を損なわずに生涯持ち続けることが出来たのは、彼にとって幸運であったと言えよう。因みにセツ夫人は松江に対してあまりよい感情を抱いていなかったようであるが、Hearn はそれに対し松江を熱烈に弁護し、「寒ささえ耐えられれば終生の住居をここに定めたい」と言っていたらしい<sup>4,12)</sup>。松江では同僚や生徒の中によき英語通訳者が複数存在したことも、好感をもたらす要因となったであろう。

### 配偶者一家

小泉セツ夫人は松江藩の大名の息女で同様の武家の養女になっていたが、夫が結婚後短期間で出奔し、維新後士族は没落貧窮していたため、Hearn との婚姻前は機織で一家を養っていたという。当時の士族の女性の常として、茶の湯生け花の嗜みは身につけていた

が公教育は小学校下等科（尋常小学校）までしか与えられなかったらしい<sup>7-10,15)</sup>。英語を教えてくれない Hearn とコミュニケーションするために自分も「へるんさんことば」を用いるなどの適応能力はあったが、欲求不満からかヒステリー発作が見られたことは長男の手記<sup>12)</sup>に明らかである。Hearn が自身の日本語下手を公けには隠した<sup>8,9)</sup>のと同じく、セツ夫人も「思ひ出の記<sup>14)</sup>」が口述であり実際には他人の筆になることを対外的に隠し通し、長男が坪内逍遙宅で、見抜かれたかと冷汗をかいたという記述も別の手記<sup>13)</sup>にある。このあたりを読むかぎり、Hearn 夫妻は宛然明治日本の鴛鴦ブチ・ブルジョアである。長男への嫉も今日から見れば相当に厳しく、少なくとも Hearn 家の小宇宙の中では Hearn は彼なりの亭主閑白を通したと言える。彼の家には夫人の養父母が長らく同居し、経済的依存や多少の気詰まりさと引き替えに、夫婦間の緩衝剤、孫たちの日本人父母代理の役もかなり演じていたらしい<sup>14)</sup>。これらの家族内部の協力態勢が Hearn の精神的安定に寄与し、五高・東大時代に時に見られた妄想傾向にも拘わらず、対外的に大過なからしめたことは認めざるを得ないであろう。Hearn も帰化により家族の財産権を守ることでそれに答えたわけである<sup>8,9)</sup>。東大講義録<sup>16)</sup>において、家庭道德の社会的重要性の強調（「すべての社会進歩、国家の力、知的ならびに身体的なすべての国民の活力は、本質的に家族に、家庭の徳性に、親の子に対する関係にもとづくことを、今日のわれわれは知っている。ギリシア＝ローマの人びとが忘れていたのはこの事実であって、これを忘れることで、われとわが身を滅ぼしたのであった。迷信的な中世の専制がヨーロッパに繰り返したたきこんだのは、この事実であった。（新しい倫理）」）が認められるのも、このことと無縁ではあるまい。

### 精神医学的考察

Hearn には前述のように妄想傾向や感情不安定性があったが、決して分裂病型や鬱病型の性格ではない。ニューオーリーズ時代から来日直後の時期に直接彼に接した英米の人々がこぞって指摘し、彼自身も認めているところでは、彼には子供っぽく人懐こいところがあり、気の合う少数の人とは極めて親密になるが、その後相手が自分の理想と異なると判ると忽ち、裏切られたと感じて離反することを繰り返していたようである。

精神医学でいう境界型人格障害は、感情の不安定さや衝動性、強い怒り、自己統制の欠如、激しく不安定な対人関係、感情的危機の反復、性行為、物質乱用、

ストレス関連性の妄想観念または重篤な解離性症状などを伴いやすく、その人の属する文化から期待されるものより著しく偏った内的体験および行動の持続的様式を呈し、臨床的に著しい苦痛や機能障害を惹起する型の精神障害である。青年期または小児期に始まり、対人関係における対象への投影的同一視や理想化とそれに続く価値引き下げを特徴とする。原因は不明であるが、親との分離＝個体化の段階の障害による自己同一性形成不全によるところが大きく、生育歴などの社会的要因のほかにも素質的要因も関与すると見られる。

家族歴・生育歴や生活態度、ことに対人関係から判断するかぎり、Hearn はこの境界型人格障害に陥る危険性を十分に有していたが、当時のヨーロッパにおける進化論的思潮と反発心を梃子にした現実適応能力、ならびに良好な精神的支援の提供者となった複数の人物の存在により、辛うじて同一性拡散や著しい社会的機能の障害を蒙ることを免れたと言えるであろう。生来の優秀な素質と周囲の支援システムに助けられたとはいえ、結果的にはほぼ完全な自己実現を達成することを得た彼自身の努力は、賞賛に値するといえよう。

### 結 語

19世紀半ばに生まれたギリシア混血アイルランド系英国人 Lafcadio Hearn は、境界型精神障害の high risk があったにも拘わらず、帰化日本人小泉八雲として明治時代の東京において「闘り家長」となり、その一生を立派に全うした。最初の着任地が松江であったことと、そこでの滞在期間が短かったことは、来日直後における妖精の国日本という印象を完全に砕くことなく持ち続けさせたという意味で、彼にとって幸いであった。セツ夫人とその養家という保護的環境に囲まれ、「神の国」日本を西欧に対して擁護しながら、彼は晩年、内界においては、Spencer の影響を受けた不可知論者として西欧に復帰していた。少なくとも長男だけは米国で教育を受けさせたいと願った<sup>2,11,12,15)</sup>のは、おそらくその現れでもあったであろう。しかし彼自身は、当時の時代背景という制約の下で可能であった限り、自由人として多文化間でのバランスを辛うじて保ち、自己の多様な側面を十分に活かして独自の小宇宙を築き上げることに成功したと言えよう。

### 文 献

- 1) Amenomori N (1905): Lafcadio Hearn, the Man. *Atlantic Monthly*. [「人間ラフカディオ・ハーン」として7)に収録]

- 2) Bisland E(1906): *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*. Houghton, Mifflin Co, Boston
- 3) Bronner M(1908): *Letters from the Raven: Being the Correspondences of Lafcadio Hearn with Henry Watkin*. Archibold Constable Co, London
- 4) 原田熙史 (1980): 文明史家ラフカディオ・ハーン. 千城
- 5) Hearn L(1894): *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Houghton Mifflin Co, Boston (Reissued 1976, Charles E. Tuttle Co, Rutland, Vermont & Tokyo)
- 6) Hearn L(1897): *Out of the East*. Houghton Mifflin Co, Boston (Reissued 1972, Charles E. Tuttle Co, Rutland, Vermont & Tokyo)
- 7) 平川祐弘 (1981): 小泉八雲: 西洋脱出の夢, 新潮社
- 8) 平川祐弘編 (1993): 小泉八雲 回想と研究, 講談社
- 9) 平川祐弘編 (1994) 世界の中のラフカディオ・ハーン, 河出書房新社
- 10) 池野誠 (1980): 松江の小泉八雲, 山陰中央新報社
- 11) 工藤美代子 (1997): 夢の途上: ラフカディオ・ハーンの生涯 (アメリカ編), 集英社
- 12) 小泉一雄 (1934): 父「八雲」を憶ふ, 文芸春秋
- 13) 小泉一雄 (1950): 父・小泉八雲, 小山書店
- 14) 小泉節子: 思ひ出の記 (1914): 田部隆次著「小泉八雲<sup>ラフカディオ・ハーン</sup>」第一版, 早稲田大学出版部
- 15) 田部隆次 (1980): 小泉八雲 (第四版), 北星堂書店
- 16) 由良君美他訳 (1987): ラフカディオ・ハーン著作集 第十卷, 英文学崎人列伝/他, 恒文社

(受付 1997年10月3日)